

大震災1月17日(1995年3月号掲載・新谷 孝)



物凄い地震だった。消防学校で勤務している頃、市民に「震度6」を起震機で体験させ、「神戸にこんな地震は来ませんよ」と言ったことが頭をよぎった。後悔した。

その時、自分は自宅にいた。幸い家族や親、兄弟に怪我はなかった。子供が持ってきたラジオのスイッチを入れる。市民から放送局に電話が数本かかっている様子。

「〇〇区の高台にある家から市内を見ると数本の煙があがっていると電話が……」と背筋に寒気を感じた。

非常招集の電話が鳴ったのは、その後すぐの6時30分頃。

車で垂水区の家を飛び出し、西神戸有料道路を通過して運南出張所へ向かう。途中のひよどり料金所に人がいなかった。料金所を越えた頃から車が渋滞しだした。丸山橋にさしかかった所で眼下に長田区が広がる。所々に数本のまっ黒い煙が立ち昇り、空を覆っていた。かなり遠くなのに赤い

炎さえも確認できるほどで、火災が発生している様子は、映画でも見ているように感じた。頭の中が空っぽになった。静かだった。

「なんでや。なんやこれは」

長田区重池町の鉄筋の市住も3階部分がなくなって7階建てが6階建てになっていた。上沢通、大開通の民家も列をなして崩れていた。

「何かをせなあかん。早よせなあかんぞ！」

背筋に何かを感じながら、やっと出張所に付いたのは7時30分頃だった。

消防車も救急車もない車庫は散らかっていた。事務所に上がる。机が移動し、引き出しは開き、食堂には割れた食器が散乱し、床はソース浸しだった。防火衣を身につける。車庫に降りた時、駆け込みがあった。

「本町で人が埋まってるんや」

「よし、今から行ったる」

後から来た署員と共にスコップ数本を自分たちの車に積み込み現場に向かう。

木造 2 階建ての 1 階が潰れていた。残った 2 階部分も傾き今にも崩れそうだ。折れた柱や土壁が重なり、むき出しの柱は空に向かって斜めになり、そこに瓦が散乱している。背中から足まで倒れた壁に埋もれ、頭は 2 階便所の床の下敷きになっている。

「おーい、大丈夫か。今出したるからな」

自分の不安を消すために、下敷きになっている人を勇気付ける。時折余震がくる。その度に屋根の土がパラパラと落ちる。作業を中止して様子を見る。

「あかん、早よせなあかんぞ。」

掘り起こしの手に力が入る。近所の人に鋸やバールを催促する。埃が喉に入る。

「くそ！」

途中、何度も声を掛ける。そうしないと自分の不安を消せないから……。まず尻が出てきた。次に足。そして頭を引っ張り出す。どれほど経ったか分からない。救出した時「やったぞ」と思った。のも束の間、まだ中に一人いるらしい。今度は傾いている家の中へ。ガスの臭いが鼻をつく。声をかけるが、返事がない。また声をかける。返事がない。

「早くこの家を出よう」

不安に負けそうになる。

「おい、ここや」微かに声がする。

「……おるぞ！……もう一人出すぞ！」

隊員に声をかける。室内の物品を表に放り出す。畳をはがして外に出す。床板を力任せにブチ破る。埃が苦しい。ここでも声をかけることを忘れない。1階が見えてきた。声もだんだんハッキリ聞こえてきた。1階室内の物をかき出す。

「手が見えたぞ」

隊員が叫ぶ。あとは一気に引きずり出した。

「やったな。」

隊員たちと顔を見合わす。汚れた顔がすごく良かった。言葉はなかった。現場を引き揚げかけた時、隣の人が

「おばあさんの姿が見えない、多分この中に……」

途中応援の隊員5名と市民とのこんなやり取りを繰り返して無事5人救出。しかし残念ながら一人はすでに……。剥ぎ取った床の下見える胸にはびくともしない柱があった。パジャマ姿だった。その脇には安否を気遣って駆けつけた兄弟たちが自分たちの救助作業を見守っていた。亡くなられていることを伝える。グッと拳を握るのが見えた。何故か涙が出た。隊員には見られたくないと思っ

た。悔しかった。手を合わせて現場を後にする。出張所に一旦引き揚げた時は昼の 12 時をまわっていた。

「さあ次は火事や！」

その頃ちょうど帰ってきた救急車に乗り換え上沢方面へ向かう。現場に近づくにつれ煙が大きくなっていく。現場に着いてみると今まで見たこともないような広範囲の火災であった。道路の右も左も燃えている。その道には焼け崩れた瓦礫がせり出し、電線も所どころ焼け切れ垂れ下がっている。西から延びてきたホースを受け取り自分たちは南への延焼阻止に走る。

「ここを守れ！絶対このアパートは燃やすな」

先着隊の必死の声を聞く。隊員と二人アパートの路地へ進入する。バリバリ ガシャーン！

「さがれ！」

倒壊家屋は通常より崩れやすい。筒先を修正する。反対側で市民が「アパートのこっち側に火が入ったぞ」

また筒先を移動する。

「ホースを引っ張れ」

今まで傍観していた人たちがかけ声をかけ協力してくれる。アパート内に進入する。煙で息苦しい。

「ホースをくれ」

天井を破り天井裏に放水する。燃えている押入の布団をかき出して外へ放り投げる。

「ここでくい止めるんじゃ」

鎮圧して外へ出た頃には、北側へ炎が延びていた。北へホースを延ばそう。そう判断したがホースを延ばそうとしている両側は炎が立ち上がり輻射熱で近寄ることもできないほど。しかし迂回するホースの余裕もなく、その時間さえも惜しい。やむなく炎の中を突っ切る。水を掛けても掛けても衰えない火。どんどん広がる火の海。それでも水を、限られた水を掛けるしかない。道路を隔てた家から、煙が出始める。輻射熱だ。放水している後ろの方で火の手が上がる。炎だけが異常に赤く、オレンジ色に大きく目の前に広がり、空には火の粉が、まるで雨のように舞っている。気がつくともう辺りは暗くなっていた。火は松本通 2 丁目から 3 丁目、そして 5 丁目へと西へ広がっていた。

「ほんまに消えるんやろか……」

あまりにも消防が無力に思えた。

消火している他の隊の隊員を見た。1 係の反対番だった。彼らは当務で家や家族、身内、大切な人の安否さえ知ることが出来ずに現場へ出動した。家は大丈夫だろうか。きっと救助活動している間も、消火している時さえも、そして今も大切な人への安否を気づかっているに違いないと思った。かけがえのない人、それは親であったり、家族であったり、子供であったり、恋人であったり……様々なはず。

「頑張れよ！」

そんな事を考えながら、また自分も活動を続ける。

火の手が延びる西には避難所の神港高校がある。ここは何が何でも守らねばならないという指示がとぶ。17 日午後 11 時頃、防火水槽の転戦にも限りがある。豊富な水を求めて新湊川へ。会下山公園の裏手を越え神港高校までのホースラインを設定する。山越えの約 800 メートルである。兵庫 4 小隊と若手の隊員で延長を始める。ホースを担いで延ばし、取りに戻ってまた担いで延ばす。そんなことを何回繰り返したか覚えていない、途中香川や和歌山の応援隊も来て合計 4 線 150 本ほどは延ばしただろうか。暗い道をみんな足を引きずっていた。

「この長靴は役に立たん」

重たい長靴に腹を立てる。放水を始めて時間が経つにつれホースが 1 本、2 本と次第に破れ始める。同時に取り替えなければ放水に支障が出る。5 分後に約 1 分間の放水停止、その間に取り替えるよう指示を出し、ホースを持った隊員を配置する。

「いまや！」

会下山の中腹で大声で叫ぶ。時計を見る。1分後兵庫4から「放水開始」の無線が入る。配置した隊員が坂を下りてくる。顔を見て分かった。成功した。おにぎりを口に入れ、筒先の交代に向かう。午後2時。

「もう18日か」

風はなかった。火の粉が舞っていた時の風がうそのようだった。現場に着いた時、避難所まで50メートルほどの所まで来ていた火は勢いを失っていた。

「やっと消えるか……」

正直いって消したというより、そんな思いになった。しかし、ここまで燃やしてもたと言うよりここでい止めたんやと思いたかった。

「寒い」

急に寒さを感じてきた。

「冷え込んできたな」

「もう少しや」

安堵感が疲れた体に寒さを思い出させ、放水しながらじっとしていると眠りに引き込まれそうになる。申し訳ないけど燃えて温かいコンクリート片を瓦礫の中から取り出し、少しの暖を取る。東の空がうっすらと青くなって西の空を見るとまだかなりの煙が昇っている。

「長田はまだ燃えてるな」

「大変やな」

それ以上は考えられなかった。

これが自分の1月17日でした。震災で感じたことは数え切れないほどあります。今思えば「もっと、できたんじゃないか」と考えてしまいます。本当に消防は力を出し切れなかった。水さえあれば……。悔しくて仕方がありません。でも、あの時は精一杯でした。消防はみんな一生懸命でした。